

それだけ言って局長はすぐに立ち去った。迫がその場に残り、響希といった局員に何かしら話をしていたが、やがて響希に向き直った。

「局長なりにきみを歓迎したいと思っているのだろう」

「あ、それで食事に？」

事態を把握出来ていなかった響希に説明してくれる。「期待ももちろんあるだろうが、年齢の近いきみに親しみを感じているのかもしれない。気負わずに行ってくる」といい

「はい」

彼女の配慮でその日は少し早めに終わらせてもらい、夕方過ぎに送迎の車に乗せられて局長の官舎へと連れていかれた。

（官舎っていうよりお屋敷だなあ）

自分に与えられた部屋とは随分違う。しかしこんなに広い屋敷が欲しいとも思わなかったので、羨むというよりはただただ感嘆するばかりだった。

食事は正直詰まりだった。歓迎というから迫やこの数日間響希の面倒を見てくれた局員達もいるものだと思っていたのが、予想外に局長と二人きり。しかも会話も憚られるような長いテーブルを挟んで、出てくるのは食べ慣れないコース料理となれば数日前までただの高校生だった響希には息苦しいばかりの空間だ。

もうすこしリラックスしていれば美味なのだろうが緊張で味を楽しむどころではない。

なんとか食事を終えて解放されると思いきや、次は応接室に通された。

局長が自分をもてなすつもりでそうしてくれているのは理解出来た。だから言われるままに従っていたのだが、その結果響希はいつのまにかソファに上体を押しつけられ、服の裾から手をつままれるというわけの解らない目に遭っている。

「何するんですか。あの、俺こういう冗談苦手なんです……」

「冗談のつもりはない」

素肌に触れる手が冷たくてぞくぞくした。逃げなければと思うのに身体が動かず、代わりに口ばかり流暢になる。

「冗談じゃないなら尚更やめてください。こういうのは卑怯だ」

「卑怯？」

「断れないのを知っててこういう事するのって卑怯でしょう？」

「何故断れない？」

「貴方は俺の上役で、ジプスでは一番偉い人間だ。ジプスを追いだされたら路頭に迷うしかない俺が逆らえ

るはずがない」

元々折りあいの良くなかった親との関係はスカウトを受けて学校を辞めた事で決定的に罅が入っていた。ジプスに入れば官舎を割り当てられるというのでほぼ絶縁状態で家を出て、それから連絡もしていない。ジプスを追いだされたからといってのこのこ帰れるはずもなく、かといって他に身を立てる能力を持たない未成年の響希では家も仕事も簡単には見つからないだろう。

「何だ、解っているじゃないか」

立場を盾にしていると言われてもヤマトは否定しなかった。それどころか、硬直する響希にのしかかり首筋に唇を押し当ててくる。

峰津院大和に何を言われようと自分の実力で生きていける場所ならとスカウトを受けたのに、いきなりこんな無体を強いられるとは思ってもみなかった。

「いやだっ……放せよ……ヤマトっ！」

思わず叫んだ。ヤマトならばそんな事はしれないと思っていた。自分の理想とする世界で、自らその理想を汚すような真似を彼がするなんて信じられなかった。

がむしゃらに暴れた腕が彼の頬にぶつかる。痛かったのか彼の喉から低い声が漏れたが構ってはいられない。どうにか彼の下から抜けでて息をつき、強く睨み

つける。

「ハハハッ……やはりな」

突然笑いだした男に呆気にとられて響希はまた動けなくなる。再び手が伸びてきたが、今度は頬を包むように、触れるか触れないかのところで止まっただけだった。すぐに手は離れていく。そのままこれまでとは違う楽しげな表情で、

「覚えているならその不自然な言葉遣いを改めろ」

とだけ言って立ちあがり部屋を出ていった。響希は彼の背中を呆然と見ている事しか出来なかった。

やがて響希の顔にも僅かに苦笑いが浮かぶ。

(勝手なところは変わらないんだな)

きつと響希に記憶があるのか確かめる為にあんな真似をしたのだ。素直に訊ねるとかそういう発想がないあたりが全く彼らしい。そう考えるとヤマトに奇妙な懐かしさを覚えて胸の奥が苦しくなる。

(あれ？ だけでも俺が覚えてなかったらどう收拾つけるつもりだったんだ？)

浮かんだ疑問をぶつけようにももうヤマトはいない。(いやいや、そうしたらきつと冗談だって言い直したに決まってる)

首を振って響希もソファから立ちあがった。乱された衣服を直す最中にどこにどう触れられたか思いだし